

研究ノート：「擬似環境論」再考

岩 本 一 善

0. はじめに

あるメディアがある社会において一定程度の期間、恒常的に使用されることによって、当該メディアに固有の特質が、その社会の構成員の感受性や認識構造、延いては人間関係にまで影響をあたえるという説が唱えられて久しい。

たとえば、M・マクラーハン (McLuhan, M.) は「テクノロジー (=メディア) はわれわれの身体の拡張である¹⁾」としているし、W・オング (Ong, W.) は、書くことが発明されて、人びとの意識がそれ以前の「声の文化」から「文字の文化」へ移行したことによって、思考過程、人間の性格、社会構造のうえに深い変化をもたらされたとしている²⁾。また、W・ベンヤミン (Benjamin, W.) が、P・ヴァレリー (Varely, P.) の『芸術論集』におさめられた「現在性の獲得」という文章からの一説を引用しつつ述べていることを、少し長くなるが以下に記すと、

「芸術の基礎づけがおこなわれ、そのさまざまな類型が確立したのは、現代とは画然と区別される時代、事物や環境を支配する人間の力が現代にくらべてきわめて微弱だった時代にまでさかのぼる。現代の芸術手段は、その適応能力と精緻さという点で、おどろくべき生長をなしとげたが、このことは近い将来、古典的な美の工業生産がきわめて激しい変化をとげることを、われわれに約束している。すべての芸術には物質的な部分がある。それは、もはや以前のような芸術観や芸術作品の取り扱いかたを不可能にし、近代科学や現代的実践の影響からのがれることをゆるさない。素材も空間も、すべてはここ二十年來、むかし存在していたものとはすっかり異なってきている。われわれはこのような大きな変革が芸術の技術全体を変化させ、それによって手法そのものにも影響を与えて、ついにはおそらく芸術という概念そのものをも、きわめて魔法的な方法で変えてしまうにいたるであろうことを、覚悟していなければなるまい³⁾」

「広大な歴史的時間のなかでは人間の集合体のありかたが変化するにつれて、その知覚様式も変わる。人間の知覚が形成される方式 (知覚のメディア) は単に自然の制約だけでなく、歴史の制約も受ける⁴⁾」

ここでひとまずそのような仮説を無条件に受け入れるとして、では現代においてわれわれの感受性に圧倒的な影響力をあたえてきた歴史の制約 (=メディア) が何であったのかと

問われたならば、それがテレビジョン（以下、TVと表記）であることは言を俟たないであろう。複製技術がマス・コミュニケーションと結びついて以来、TVほどに受け手に及ぼす効果や影響が大きく、また高い普及率をもったメディアは、少なくとも現在までのところ現われていないのだから。となれば、ここで改めてTVというメディアに固有の特質とともに、そのような「歴史的制約」によって変化したわれわれの「知覚様式」、すなわちTVというメディアを日常的に享受することによって醸成されたわれわれ自身の感受性の変化や文化について検討しておく必要があるだろう。上に引いた、すでに手垢にまみれるほど度々引用され続けてきたベンヤミンの言葉は、未だその重要性を一向に減じていないはずなのだ。

そこで本稿においては、直接的な生身の経験によって構成される実在の世界と、メディアに媒介された知識・情報をもとにした間接的な経験によって構成される表象の世界との齟齬といった問題を足がかりに、TV時代のわれわれの「知覚様式」について考えてみたい。具体的にはそれは、われわれが今現在暮らしている環境とはもはやメディアによって媒介された情報やイメージをもとに構成された二次的な世界でしかなく、また、実際にわれわれが「知って」いると思っている知識の大半は、自身の直接的な生身の経験ではなく、メディアによる間接的経験から得られたものであることを関連先行研究をもとに追認し、しかしそのことを反射的に憂慮すべき事態として捉えるのではなく、そういった事態がそれ自体として持っている意味について検討する、という手順を踏む作業になるであろう。

1. 擬似環境論の系譜

1-1 「擬似環境」論

清水幾太郎は、1950年の段階で、人間は「直接的接触の世界」と「間接的接触の世界」という二つの世界に住んでいるのだとしている。前者が対面的直接コミュニケーションを基盤とした一次的世界であるとすれば、後者はメディアを介した間接的コミュニケーションによって成立する二次的世界である。たとえば、印刷メディアはその黎明期から現在に至るまで、知的エリートあるいは近代的市民の特権的メディアという側面を保ち続けてきた。この観点からすれば、近代社会において民主政治を支えてきたのは、印刷メディアを介して市民各人の主義主張が広く一般に流布され交換されること、言い換えれば「間接的接触の世界」における相互コミュニケーション過程による共通意志の形成であったといえるだろう。一方、清水自身がこの段階で指摘しているように、「直接的接触の世界」に暮らしているのは「庶民」であるとされる⁵⁾。

しかし、電子メディアであるTVが圧倒的な影響力をもつようになった今や、それが「庶民」と呼ばれるべき対象であるのかどうかは別として、大部分の人間が「間接的接触の世界」の方にかかなりの比重をおいて暮らしているのが現状である。われわれは、われわれ自身の生身の知覚の及ばない範囲の知識・情報を、TVや印刷メディアといったマス・コミュニケーションのメディアから得ているばかりではなく、パーソナルなコミュニケーションにおいても、電話をはじめとした人工的メディアを頻繁に介在させる傾向にある。ここで問題となるのは、では、そのことがわれわれの「知覚の様式」にどのような影響をあたえる

のかということだ。

新聞、ラジオといった、TV以前のマス・メディアが主要なメディアであった時代においても、そのような問題は既に検討されてきた。

W・リップマン (Lippmann, W.) がその名著『世論』において、「擬似環境」(pseudo-environment) という概念を提示したのは1922年のことである。当時、主要なマス・コミュニケーションのメディアとは言うまでもなく新聞であった。

以下、リップマンのいう「擬似環境」について概説すると、日常生活においてわれわれは、自らが直接的に経験可能な世界の中に暮らしていると思っている。そこでの経験は、自身によって見聞きし、触れ、味わうことによって得たものであり、仮にその経験をもとにこの世界に働きかけた行動が不適合であったとしても、われわれは自己の能力でそれを調整することができる。リップマンはこのような世界を「現実環境」(real-environment) とよんだ。しかし、現代社会においてわれわれは、莫大で複雑に入り組み、もはや一個人の認識能力では処理しきれないような世界に否応なく関わって生活せざるを得ない。こうなると、われわれにはそのような「現実環境」をそれ自体として把握することなどできないから、それに代わるイメージを頭の中に描き、それを自己の環境と想定し、そのイメージに対して実際の行動をおこすことになる。ここでリップマンは、そのように頭の中で構成されたイメージを「擬似環境」と名付けたのである。「擬似環境」自体はイメージでしかないから、当然「現実環境」との齟齬が不可避となる。ところがわれわれは、「擬似環境」の方を自己の環境であると思ひ込んだうえでそれに反応して行動するから、実際のわれわれの行動は「現実環境」に対してなされることになり、結果として「現実環境」から予想外の反響を被ることになる。かたて加えて、移動、伝達といったコミュニケーション・メディアが高度に発達した現代社会においては、「擬似環境」の肥大化がますます加速してきている。その結果われわれは、「現実環境」という確固とした土台、生身の手触りをもとにした地に足のついた思考や行動の基盤を切り崩されていくという悪循環に陥っている、となる。

ここでリップマンが問題にしたのは、事実をイメージに処理してわれわれに伝えるマス・メディアの果たす役割である。周知のように、マス・メディアによって報じられる「事実」がわれわれ受け手に伝えられるのは、そのような「事実」を報じるべき価値のあるものとして選択し、その後それを言葉なり映像なりの形で記述し、加工する多数の専門家の手による処理を経た後である。とすれば、ナマの事実がわれわれのもとに「事実」として伝えられる間には、それが意図的なものであるか否かは別としても、何らかの変形が加えられる可能性が極めて高いということになる。さらに、われわれ受け手の「擬似環境」のイメージが形成されるにあたっては、マス・メディアから提供された知識・情報が重要な要因となっているだけではなく、そのような知識・情報は「ステレオタイプ (=紋切り型) (stereotype)、つまり画一的な既成イメージや先入観、偏見といった、単純化された型にはめ込まれて送り込まれてくることが多いのである。報道された「事実」を「現実環境」と照合し検証する能力も余裕もないわれわれ受け手の大部分は、これによってますます「現実環境」と「擬似環境」との乖離を大きなものにするであろう、というのがリップマンの憂慮であった⁶⁾。

高度情報化社会とも称される現代社会に暮らすわれわれにとって、リップマンのこの憂

慮は今なお妥当なものであるどころか、むしろますます切実なものになってきている。

1-2 「擬似環境」論諸説

実際、リップマンの『世論』以降、「現実環境」と「擬似環境」とのギャップに関する議論は、さまざまなヴァリエーションを生んできた。

たとえば清水幾多郎は、前述した「直接的接触の世界」と「間接的接触の世界」との二重性を「オリジナル」と「コピー」との関係として捉え直し、1950年の段階での自身の見解に修正を加えている。そのうえで、マス・コミュニケーションの高度の技術化、機構化がそのまま進歩として解されるためには、マス・コミュニケーションによる事実の「コピー」が「オリジナル」を忠実に写し取ったものであるという条件が満たされていなければならないのに、実際には両者の間にはギャップが存在しているだけでなく、「コピーの支配」という事態が生じている、と言うのである。その結果、われわれ受け手は「人間能力のペシミズム観」を呼び起こされるのだ、と。

「テレビの映像は巨大な機構があるオリジナル（原物）をコピーしたものであるが、受け手にとってはつねにコピーしか手中にできない。このコピーがはたしてオリジナルと正確に照合しているかどうかを検証することはできない。テレビの出現による『活字の時代から映像の時代への変化は、われわれが証拠を握る時代から証拠を奪われる時代への変化である』⁷⁻⁸⁾

またこれより後、藤竹暁は、「マス・コミュニケーションの環境造成功力」という概念を提示した。それによると、ジャーナリズム活動が専門的職業による周期性をもった活動となり、さらにそれが資本主義社会における利潤を生む活動としてなされ、われわれ受け手の「環境」を意味付ける行為が商品として成立するようになると、「擬似環境」が「現実環境」に取って代わって、実質上われわれを取り巻く外的諸条件になる、つまり「擬似環境の自己展開（＝擬似環境の環境化）」という事態を来す、というのである。ここでさらに重要なのは、「擬似環境」においては、「現実環境」のように、自身が直接経験し行動したことの結果との関連から当事者によって意味付けられるのではなく、われわれに提示された時点で既に一定の意味を持っている、という指摘である。したがってわれわれは、「擬似環境の環境化」いう事態においては、自身でそこから意味を見出すというのではなく、与えられた意味を 수용するということになる。そのことによってわれわれは、社会の他のメンバーとの間に擬似的な世界を共有するのだという⁹⁾。

D・J・バスティン（ブーアスティン）(Boorstin, D. J.) は、このような「擬似環境」論を、「擬似イベント」(pseudo-events) という概念をキー・ワードにしてさらに展開させた。それによると、「擬似イベント」とはニュース製作者によって企図された「合成的な新奇な出来事」であるという。つまりそれは、自然発生的な出来事ではなく、「報道され、再現されるという直接の目的のために仕組まれた」ものなのだ。バスティンは、1951年シカゴでのマッカーサー元帥のパレードを例にあげているが、そこには、実際にその現場で見物していたのに今現在自分の眼前で何が起きているのかを理解できずにいた群衆と、

マッカーサー本人は勿論、熱狂的に反応する見物人を選んでスイッチするカメラの映像とアナウンサーのことばとによって、劇的な祝典を目撃しているかのような印象を抱いたTV中継の視聴者についての記述がある。イベントのTV放送は、現場で実際に起こっている出来事をそのまま伝えるのではなくて、視聴者が期待していると思われるものに一致するように「仕組まれる」という訳だ。

さらにバスティンが指摘するのは、当時既にそのような「擬似イベント」が蔓延していった一方で、読者や視聴者といった受け手 (audience) は、自然発生的な出来事をそのまま伝える報道の自然さよりも、物語の迫真性や「本当らしさ」を好む傾向にあったということである。しかも「擬似イベント」を作り出している当事者の殆どには受け手を欺くなどという意図はなく、むしろ誠実かつ精力的に仕事を遂行しており、一方のわれわれ受け手も「擬似イベント」の方が現実そのものよりも現実的であると考え、「仕組まれた」現実に対する信頼感も完全に現実的なものになっているのだという¹⁰⁾。

90年代に入り、上に概説してきたような「擬似環境」論の所説がより切実なものになってきたとき、ダヤンとカツ (Dayan, D., & Katz, E.) により「メディア・イベント」 (media events) という概念が提示された。彼ら自身はなぜか認めようとしないが、これは明らかにバスティンの「擬似イベント」論の直接の影響下にあるものである。いずれにせよ、何らかのセレモニー¹¹⁾ が「メディア・イベント」として上映される、つまりTVで中継されることにより、本来は実際にその現場に臨場して直接的な経験として体験されるべき「祝祭 (フェスティバル)」的出来事が、家庭という場でメディアを介して経験される「見せ物 (スペクタクル)」に変容してしまう、というのが彼らの主張である。ここで、「フェスティバル」とは、焦点が散漫あるいは拡散していて、参加者の間に相互作用が存在すること、つまり演じ手と観衆の役割が固定されておらず、パフォーマンスの本質が完全に観衆の反応に依存するような出来事を指すのに対し、一方の「スペクタクル」とは、焦点が限定されていて、演じ手と観衆との区別が截然とあり、なおかつ両者の相互作用も低いような出来事を指している。TVは、「フェスティバル」を「スペクタクル」に転じることによって、主催者によって企図された当該イベントの意味付けを際立たせ、解釈を付与する、したがってTVの視聴者は現場にいる本来の聴衆以上にイベントの象徴的な意味に引き込まれる、というのだ。さらに、このような「現場にいない経験」が貧弱で本来的な姿をなくした経験として受容されるのではなく、それとはまったく異なる、むしろ特権的な経験として保護され、創出されるのが現代の「メディア・イベント」とされるとされる¹²⁾。

2. 「擬似環境」のエコロジー

2-1 第二の自然としての「擬似環境」

さて、これまで「擬似環境」論に連なる先行研究の系譜を略説してきた。概括すると、われわれはもはや自らの直接的な経験から得られた知識によって構成されるような「現実環境」には暮らしていないこと、それは主にマス・コミュニケーションのメディアという「他者」による代理的な経験を間接的に受容することによって構成されたイメージからなる世

界、「擬似環境」に取って代わられたこと、そしてそのような「擬似環境」、「他者」の経験によって構成された諸イメージは、われわれ一般の受け手が、それをオリジナルと照合し、検討することが可能であるような閾をはるかに超えて膨張してしまったこと、そればかりではなく、いまや「擬似環境」がそれ自体として自律的に展開し、「現実」を凌駕するなどという事態が起こっていること、などとなる。

確かに、卑近な例から考えてみても、たとえばわれわれが屋内にいて地震らしき振動を感じたときまず何をするかといえ、TVのスイッチを入れて地震速報のテロップが流れるのを待つということであったりする。それは、たった今自分が現に体験したはずの出来事の確認を、TVという間接的経験のメディアによって得るということだ。また、近年の観光旅行が、殆どメディアによって既に間接的に与えられたイメージの追認作業になっているばかりか、いざ現地でその実景を目にした途端、現実の「らしくなさ」に拍子抜けしたり落胆したりするという倒錯的経験も珍しいことではない。

しかし、こういった「擬似環境」の瀰漫は、果たして本当に憂慮すべき事態でしかないのだろうか。あるいは、そういった事態によって、われわれが直接的に見聞し、触れ、味わうことのできる世界、「現実環境」が縮小したことだけが問題とされるべきことなのだろうか。

哲学者今道友信は、かつては所謂「自然」だけが人間にとっての環境であったが、機械の登場以来、今や「技術連関」(conjunction technologique) という、自然とは他のもう一つの技術的な環境があるのだとする。それは、「それによって人間が生活を便利にすることのできる、一つの体系」、「機械が連絡しあつた世界」であり、「自然と並んでわれわれの日常生活の環境」になっているという¹³⁾。われわれのここでの論議に照らしていえばそれは、メディアが相互に連絡しあつた結果できる「メディアの世界」¹⁴⁾ と言い換えることができるだろう。

「技術連関」であるにせよ「メディアの世界」であるにせよ、今やそれがわれわれを取り巻く日常的な世界、環境になってしまっていることは、前述の「擬似環境」論諸説も説くところである。逆説的ながら、今や人工物から構成される世界はわれわれにとって第二の自然となってしまっているのである。ただしここで、人や物の物理的な移動速度を高めることによって距離を克服し、人と人との関係を接近させるというベクトルに沿って発展してきたもの(船舶、汽車、自動車、航空機など)と、メディアを介してある地点とある地点とをリアル・タイムに結びつけることによって時間=距離を無化させてしまうというベクトルに沿って発展してきたもの(電信、電話、TVをはじめとするテレ・コミュニケーション・テクノロジーなど)とでは、われわれの環境に与える影響という点で意味が異なってくるはずだ。そして、われわれがここで問題にするのはこの後者のエコロジーなのである。

2-2 〈リアル・タイム〉という距離

M・マクルーハンは1964年の時点において、次のように述べている。すなわち、西欧世界は機械技術による「外爆発」(explosion)の過程を終え、電気技術による「内爆発」(implosion)の段階へと突入した、機械の時代にはわれわれの身体が空間に拡張されていったのに対して、電気の時代においては中枢神経組織それ自体が、しかも地球規模で拡張さ

れることによって、空間の概念が無化されるまでになってしまったのだ、と¹⁵⁾。

マクルーハンは後年、電子通信網についても言及するのだが、ここでいわれる電気の時代というのが、TVを中心とするマス・コミュニケーションのメディアを念頭においたものであることはいうまでもないだろう。確かに、TV中継放送ネットワークの整備によって、われわれはほぼ同時に世界の各地で起きた出来事をメディアを介して目撃することができるようになった。マクルーハンはそれを、われわれの意識が生身の肉体から離脱し、あらゆる空間的制限を越えて、世界の複数の場所に同時に存在することが可能になったのだとして、このように「あらゆるものが同時に存在する」にいたった世界を、「グローバル・ヴィレッジ」(global village)と名付けた¹⁶⁾。

だがしかし、問題をTVに絞ってみたとしても、無化されるのは果たして空間の概念なのだろうか。TVモニタの前に座ったわれわれは、そこに映しだされた映像が映像でしかないことを、言い方を変えれば、ブラウン管に映っている出来事が、TVモニタという箱の内部で現実に行進しているものではないという、至極当然の事実を知っている。このとき、「われわれの身体から意識が離脱し、ネットワークを通じて距離の感覚を超越する」などという錯誤が、厳然としてそこに存在するブラウン管という枠組み——空間的制限——を前にして起こり得るのであるだろうか。実際に無化されるのは、「リアル・タイム (同時性)」ということばに象徴されるような、時間の感覚ではないのだろうか。TV放送が一般家庭に「リアル・タイム」の音声と映像を伝える、所謂「ナマ中継」「ライブ放送」が極く日常的なものとなって以来、TVがあたかも空間的な距離の概念を無化するかのように見えるのは、その距離を通常的手段で物理的に移動するのに費やされるはずの時間が無化されることによるのではないのだろうか。少なくとも既存のテクノロジーによる物理的な移動手段では到底不可能であるようなスピード(それこそ、いずれ地球規模で光ファイバ網が整備された暁には光速で?)、すなわち「リアル・タイム」である地点とTVモニタの前に座ったわれわれとの間の結び付け、それによって距離を無化してしまうメディア、それがTVをはじめとするテレ・コミュニケーションのメディアであるとはいえないだろうか。さらにわれわれは、そのようなメディアを日常的、習慣的に利用し続けることによって、そもそもメディア自体の特性であったものをわれわれの同時代的感受性にまで浸潤させ、ついにはそのような「リアル・タイム」の歪んだ遠近法にも適応してしまっただけなのではないか。

歪んだ遠近法とは何か。その最たるものが「現在」という時間の位相の変化である。ここにいたって「リアル・タイム」とはもはや「遅延した時間」の対義語ではなく、「現在」ということばの対義語となっている。それこそが「リアル・タイム」というテクノロジーのもたらした結果である。P・ヴィリリオによればそれは、『『現在』(present)という時間を<今・ここ>から切り離し、世界の中に確固としてある『具体的な存在』(concrete presence)ではなく、世界中のどこにでも遍く在ることが可能であるような『抽象的な遠在』(discreet telepresence)に変えてしまう』¹⁷⁾ということである。

かつての都市化は、物理的な移動手段の速度を高めることによって、すなわち「リアル・プレイス」(real place)のベクトルに沿って進捗したが、今やそれはすっかり「リアル・タイム」のそれにとって代わられている。われわれの「技術連関」の世界は、前述した、

船舶、汽車、自動車、飛行機などといった、人や物の物理的な移動速度を高めることによって距離を克服する方向に沿って発展してきた技術によって構成される世界から、TVをはじめとしたテレ・コミュニケーション・テクノロジーに代表される、メディアを介してある地点とある地点とを「リアル・タイム」に結びつけることによって時間=距離の概念を無化させてしまうという方向に沿って発展してきた技術によって構成される世界へとシフトしたのである。

その結果われわれは、ある地点から別の地点へと物理的に移動するというものの持つ意味を変えてしまった。われわれには、ある地点に「とどまった」ままのメディアを介した移動が可能となった。TVによって、「とどまった」ままで、なおかつ既存のメディアによるよりも強烈に「現在」という時間を知覚し、想像することが可能となったのだ。それは、TVモニタの前で受動的な不活性化状態にあること、そこに「とどまって」ただ座っていること、「リアル・タイム」であることが、実際にその場所までの距離を移動し、その場所に在ることよりも遥かに「速い」ような世界だ（“Be quick! Even when standing still.”というドゥルーズ&ガタリ（Deleuze, G., & Guatari, F.）のこぼれの非常にアイロニカルな意図的誤解？）。

しかしそのような世界にはもはや、「量」や「厚み」といった、これまで人間の社会を成立させてきたような具体的な世界の「手触り」が存在しない。世界の「手触り」とは物理的な移動、実際の場所や物、人との距離といったものに因るところが大であるのに、「リアル・タイム」のテクノロジーは、二点間の距離や世界の広がりといったものを一切無化するからである。

さらに「リアル・タイム」のテクノロジーは二重の意味でわれわれの世界を縮小させる。第一には、われわれの世界の地表がTV中継放送ネットワークの整備によりすっかりカバーされることによって。第二には、その結果われわれがTVモニタの前に「とどまった」ままでいることで、われわれが直接的に経験する世界が縮小することによって¹⁸⁾。それは、一方でグローバルな拡張であるにも関わらず、その広がりを受動的に無化するほどの速度で世界の断片を結び付けるのだ。

3. おわりに

以上が、われわれの暮らす世界、「メディアの世界」の概観である。

ところで、いかに「擬似環境」論諸説の説く主張が現実に行進しようとも、あるいはまた、たとえそれがもはや抜き差しならないほど「メディア社会」であろうとも、われわれの暮らす社会や環境が、ある地点間の距離やその間の物理的な移動という、具体的で直接的な感覚をすっかり欠いたものとなるなどというような事態は、少なくともこれまでのところ些かも切実感の伴わないはなしであったはずである。

確かに、メディアによって掬い取られた世界の方がわれわれにとってよりリアリティのある「事実」となり、現実がメディアに「媚びる」などという事態も実際に起こってはいる。政治的なセレモニー、オリンピックをはじめとするスポーツ・イベントなどは、TVという機械の眼で複合的に伝えられることによって初めて包括的な理解が可能となるような

対象であるし、そういった所謂「メディア・イベント」だけでなく、TVによって中継されることを前提として予めプログラムされる出来事、物、人の例などは今や枚挙に暇がない。しかし、既にTVにおいて現実のものとなっている「リアル・タイム」のテクノロジー、テレ・コミュニケーションのテクノロジーによって、われわれの直接的な経験、生身の知覚によって把握されていた地平が、TVモニタという四角い「窓」からの情報に取って代わり、われわれの感覚に遠近感や内と外との感覚の混乱といった歪みをもたらすなどという事態がはじめて切実な問題となったのである。仮にそれが今は萌芽的な段階でしかないにせよ、いずれわれわれは端末の前に「とどまって」いることで、良くも悪くも「リアル・タイム」で世界との交通を完結させるようになるだろう。

ここで、「メディアの世界」など所詮二次的な世界にしか過ぎないのだから、直接的に経験される生身の世界の圧倒的リアリティを前にしたとき、「擬似環境」が「現実環境」に取って代わるなどという倒錯の事態は今後も決して起こりようがないのではないか、という疑義に答えておくことにする。

われわれは、直接自らが現実環境を知覚し、掬い取る場合においてもやはり自己と環境との関係を翻訳するコトバ、レトリックを介在させることなしには世界について理解できない。しかしそのコトバやレトリックもまた元を糺せば人工物であるが、だからといってそれによって掬い取られた認識を二次的な世界であるなどというのだろうか。確かに、「擬似環境」の場合、第一次の認識の枠組みをメディアという「他者」に委ねてしまうことに問題はある。それでも、現在われわれが「メディアの世界」を第一義的な世界とし、またそのことによってわれわれの認識構造や感受性に大きな影響を被っているのは事実である。実際、われわれが今現在「知っている」と思っている知識の出处や、われわれの生活を成立させている基盤などといった条件は、殆どみな「メディアの世界」から提示されているものだ。そうなると、却ってますますわれわれの世界が「メディアの世界」という牢獄に規定されているのだと思わざるを得なくなるかもしれない。しかしこの点について中野収は、「文化も、言語、伝統も、われわれが産み落とされたときにすでにそこにあり、われわれはこれから自由ではないし、厳密にいうと文化・言語・伝統の外で生きること、そもそもその外を考へること、が不可能」なのであり、また『「牢獄性」についていえば、文化・言語・伝統のほうはずっと強いし、われわれに対する強制力・拘束力となると今日のメディアの比ではない」としている¹⁹⁾。ということは、確かにわれわれは抜き差しならないほどに「メディアの世界」に埋没してはいるが、その一方で、これは中野自身は指摘していないことなのだが、逆にいえば「メディアの世界」に関しては後天的に修正可能な範囲がかなりの程度においてあり、どのような世界を自らのものとするかを選択の問題とし得るような潜在的可能性があるということである。

これは重要なポイントだ。一般に、われわれが「メディアの世界」を第一義のものにするといったときに連想するのは、マス・コミュニケーションの効果・影響研究、あるいは心理学などでも繰り返し取り上げられてきた、フィクション(=虚構)と現実との混同といった問題である。「擬似環境」自体は二次的な世界ではあっても、少なくともことばの表面上の意味ではフィクションなどではない。それがあつた程度は信頼に足る世界であるからこそ、何かと喧伝されるマス・メディア批判にも関わらず、われわれは「メディアの世界」を第一義のものにしつつ日常生活を送っていられるのである。したがって、少なくとも「擬似環境」を生み出し、送り伝えている側の姿勢が従来の枠組みを著しく逸脱したものでない

限り、フィクションと現実の混同など、実は些かも問題ではない²⁰⁾。より正確にいうならば、フィクションと現実とを混同してしまうような倒錯の事態に陥ってしまう人間は圧倒的な少数にとどまるであろうから、そのこと自体は無視しても構わないような問題であろうということだ。その結果彼らが引き起こすかもしれない現象が社会にどのような影響を及ぼすのかということは、切実ではあるがまた別の問題である。重要なのは、フィクションや「メディアの世界」の向こう側に確かに具体的な「手触り」や「臭い」をもった生身の現実が存在していることに気付いていながら、自らの環境としてそのような世界ではなく、「擬似環境」や虚構の世界をあえて選択する感受性なのである。となれば問われるべきは、そういった感受性の変化がもたらすかもしれないわれわれの暮らす世界への影響、人間関係の変化などといった問題なのであるが、この点については一先ず他の機会に委ねることとする。

註

- 1) McLuhan, M. *Understanding Media: The Extensions of Man*. 1964. (栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房、1987)
- 2) Ong, W. J. *Orality and Literacy, The Technologizing of the World*. 1982. (桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991)
- 3) P・ヴァレリー『芸術論集』、Benjamin, W. *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit; drei Studien zur Kunstsoziologie*. Suhrkamm. 1936, 1973. (高木久雄・高原宏平訳「複製技術の時代における芸術作品」、佐々木基一編集解説『複製技術時代の芸術——ヴァルター・ベンヤミン著作集2』所収、晶文社、1970) より引用
- 4) Benjamin, *ibid.*
- 5) 清水幾太郎『政治とは何か』みすず書房、1950。
- 6) Lippman, W. *Public Opinion*. 1922. (掛川トミ子訳「世論」(上)(下)、岩波書店、1987)
- 7) 清水幾太郎『テレビジョン時代』『現代思想入門』岩波書店、1959。
- 8) メディアが活字であっても、われわれ一般の受け手が常に「オリジナル」にアクセス可能であるとは限らないのではないか、という疑点はここではひとまず留保しておくこととする。
- 9) 藤竹暁『現代マス・コミュニケーションの理論』日本放送出版協会、1968
- 10) Boorstin, D. J. *The Image*. 1962. (星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代』東京創元社、1964)
- 11) ダヤーンとカット自身は「メディア・イベント」の対象をTV中継されるイベント一般ではなく、日常とは異なるセレモニー的パフォーマンスに限定している。
- 12) Dayan, D., & E. Katz. *Media Events: The Live Broadcasting of History*. 1992. (浅見克彦訳『メディア・イベント』青弓社、1996)
- 13) 今道友信『エコエティカ』講談社学術文庫、1990。
- 14) 中野収『メディア人間』勁草書房、1997。
- 15) McLuhan, *op. cit.*
- 16) McLuhan, *op. cit.*
- 17) Virilio, P. *Open Sky*. 1997. Trans. Julie Rose. Trans. of *La Vitesse de Liberation*. 1995.
- 18) P・ヴィリリオによればそれは、水や大気汚染といったものと並んでわれわれの環境を「破壊」している、「速度圏(dromosphere)」の汚染であるという。
- 19) 中野、前掲書。
- 20) 一時巷間を賑わしたヴァーチャル・リアリティ(virtual reality)ということばがある。このことばが、「擬似環境」「技術連関」をも含めた、「われわれが現在暮らしている世界のリアルと見分けがつかないような世界を再現したもの」であるという意味において使用されているなら、少なくともこれまでのところ、それは途方もないホラ話に過ぎない。しかし、ヴァーチャルとは「実質上そのようなものと見做してよい」ということだから、このことばが、確かに現在のリアルとは明らかに異なるけれども、「実質上リアルと見做して構わないほどに機能している体系」を意味しているというのであれば、それは既にTVにおいて実現化しているなどといったら言い過ぎだろうか。